Interview

アバドのタクトの下では、皆が自由になれます。

ルツェルン祝祭管弦楽団のメンバーに聞く

取材・文＝中　東生
Text=Shinobu Naka

ルツェルン祝祭管弦楽団の精緻な音色は独特だ。日本公演を控えて、このオケを創り上げたアバドをより理解するため、同管の楽団員に話を聞いた。

まずは、自他共に認めるアバド崇拝者、ハープのジュリー・パロック。

94年、ベルリン・フィルが《エレクトラ》を演奏した時、附属カラヤン・アカデミー生として、プロのオケで初演奏したのが、アバドとの出会い。

「あの時クラウディオに会わなければ、私の音楽に対する愛情は変わっていたでしょう。私の人生において、最も重要な出会いの1つです。私のキャリアには常にアバドの存在がありましたが、そうでなくとも、彼に尊敬の念と愛情を持たない楽団員はいないでしょう。彼のタクトでは、皆が自由になれます。特にマーラーの解釈は、マーラー自身ではないかと思えるほどの深い洞察力があります。彼は楽団員に絶対的な信頼を持っていることを感じさせるので、弾き手にとっては最高の待遇です。コンサートでは独特の緊張感を醸し出し、音楽の鳴っていない休符時での集中力は特筆すべきものです」

次は、ルツェルン祝祭管の前身だったスイス祝祭管弦楽団当時からの、貴重な2人の楽団員のうちの1人、ホルン奏者のニクラウス・フリッシュ。

「このオケはアバドが集めた高いレヴェルの人材で構成され、しかも、私も一員であるザビーネ・マイヤー管楽器アンサンブルのような室内楽グループを、いくつも内包しているのが、よい結果を生んでいると思う。

アバドの特徴は、練習中にあまり言葉で表現せず、棒で表す指揮者。音楽に没頭し、個性を表現するよりも音楽を生かすタイプ。機械的に拍子を刻むことはしないので、共演するのに集中力を必要とするが、曲を知ってしまえば、目指しているものが明確にわかる。作曲家の意図再現に固執するというより、自分で音楽を感じて作り上げていく、本物の音楽家だ。彼の練習はあまりよくないと評価する者もいるが、コンサートになると、彼の表す喜びから、最後列の奏者まで皆が全力を尽くしたい衝動に駆られ、結果的に最高の力を引き出せるのである」

最後に、人生の半分の年月をアバドと演奏しつつ、古楽とジャズを組み合わせた独自のプロジェクトを創り出し、ルツェルン祝祭週間招聘候補にもなったヴァイオリン奏者、エティエンヌ・アベリン。

「第一印象は強烈でした。練習場に入ってくるなり、最後列にいる僕にまで届くオーラを発していました。楽団員と一緒にいられることを心から喜び、若者でも同僚として、ファーストネームで呼び合います。彼の音楽は空間を創造し、私は周りの人の音を聴くことを学びました。そこから、人間的な音楽が創り出されるのです。

彼は政治的なことにも興味を持ち、キューバや終戦直後のサラエボ、今年はベネズエラにも楽器を運び、現地の人々が音楽を楽しめるような環境作りに努めています。そんな彼の姿勢から、僕も若者に訴える手段としてのプロジェクトを考案したので、クラウディオに報告するつもりです」

たくさんの若者の人生に大きな影響を与え、心をつかんで離さないアバド。インタヴュー時の皆の目の輝きを見ながら、彼の奏でる音楽がもつ力を理解した。

マーラー・ユーゲント・オーケストラからボローニャ・モーツァルト・オーケストラまで、アバドのオケにはいつも参加しているエティエンヌ・アベリン